

マルトモ(株)チルド部門の食品の盛り付けや包装などを行っている(有)紺堂海産。父親が経営していたこの工場を、3代目として初城さんが任されたのは今年5月。つまり、経営者になったばかりです。

「学校卒業後、7年ほどは母親が経営する仕出し屋にいました。だから仕事が全然違いますね。小さいときから工場に遊びに来たり、学生のころは年末など繁忙期に手伝ったりしていました。が、この工場の仕事はまだまだ勉強中なんです」

工場は27名の従業員で毎日稼働しています。マルトモ(株)から届いた原料は、その日のうち

紺堂 初城さん

この工場の仕事はまだまだ勉強中なんです。

に包装し、マルトモ(株)に納入します。この時期に作る包装品は1日に約2万個で、基本は朝8時から午後5時までです。年末年始に向けた11月や12月のピーク時には、午後8時くらいまでかかるそうです。

「食品を扱っているのいろいろなと気を遣いますが、原料と包装に使う材料や、機械もマルト



モで準備されているので、うちで確保するのは従業員だけです。

だから日々の経営ではそれほど不安はありません。一番大きな

不安は、マルトモチルド部門の縮小です。うちは100%マルトモの商品包装で成り立っていますから、万が一チルド部門がなくなつた場合には、経営を大きく考えなければいけません。現在とはとにかく商品を確認に包装できるよう、月に1回は品質管理について工場勉強会をしています」



●Profile
こんどう はつき
 神崎在住の32歳。平成21年6月より海産物加工業「(有)紺堂海産」の代表取締役就任。

加納さんの漁師歴はもう30年。

「親父がなくなるまで、5年前に『舵をお前がやれ』と言われて、一緒に船に乗っているいろいろなとを勉強しました。親父は『かかり(障害物)があるけん避けよ』とは一切言わなかった。網が破れてしても『破れたやん、どうするん』て言うても、『どうしたら破れんか、まわりの山や煙突の場所見て自分で考え』って。自分で見てやって覚えていくしかなかった」

自分で自分の漁の形を見つけてきた加納さん。漁師は漁具も人それぞれで、船や網に違いがあると言います。

「網に使うステンの数も思い思いやし、目の数も人によって違

う。みんな自分で好みの形をみつけるんや。漁師はしんどいけど、いろいろ考えるのは楽しい

し、やりがいがある」とはいえ、漁師の仕事は過酷です。午前中に1人で漁に出て

帰港するのは翌朝です。海の上では1人のため、船が止まった

時は大変です。常に危険の伴う、まさに命がけの仕事。だからこそ、この仕事を支える家族や仲間の絆は深まります。加納さんが帰港し、水揚げをする際には、港で待ち受ける奥さんと仲間たちの姿があります。

水揚げを手伝う奥さんに、天気の良い日は心配じゃないですかと尋ねたところ、「そんな日こそ魚の値がいいから頑張ってるねと言ってますよ」という奥さんの答えに、「夫婦で笑い合っていました。それはお互いに信頼し合っているからこそ。これからも夫婦2人3脚で活躍してほしいです。」



何も考えんと15歳のときから漁師や。

加納 一成さん



●Profile
かのう かずなり
 新立在住の45歳。中学卒業後から漁船を所有し、小型機船底びき網漁業を経営。